

## 自主シンポジウム 1

## 教育心理学と認知的エスノグラフィー

企画・司会 茂呂雄二（筑波大学）

話題提供者 佐伯 胖（東京大学）・星 由美（東京大学）

無藤 隆（お茶の水女子大学）

石黒広昭（宮城教育大学）

指定討論者 上野直樹（国立教育研究所）

認知的エスノグラフィーは、参与観察とマイクロな行為分析を特徴とする方法であり、いわゆる質的分析の一つに数えることができる。認知的エスノグラフィーは、実験室的、非状況的認知研究の行き詰まりが背景となって開拓された方法論である。学校と学校以外のワークスペースの比較にもとづく学校の特殊性の抽出、長期的な学習過程の記述、社会歴史的な背景による状況の再編成過程とそれに伴う精神過程の変化の描出など、教育心理学の可能性をさらに広げることが期待できる。

このシンポジウムの話題提供者は、いずれも学校や学校以外のワークスペースをフィールドにしている方々である。

佐伯・星両氏は、病院において患者と医療スタッフの間に交わされる対話過程を詳細に記述している。

無藤氏は、幼児が対象や同輩との間に交わされるやり取りを活写している。

石黒氏は、日本の言語・文化に適應しようとする子どもたちについて、適應の問題性をめぐりながら記述している。

そして上野氏は、工場・市場などのワークスペースについて、マイクロな行為の編成から、その状況の組織化を明らかにしている。

ここでは、それぞれの具体的な方法論を紹介してもらいながら、教育心理学に対して、認知的エスノグラフィーの持つ意味を議論したい。

## 認知の状況性

認知的エスノグラフィーは、私たちの知的な営みがそもそも状況的であるという仮説に立っている。つまり〈認知の状況性〉であり、私たちの〈知識と知的な行為〉は基本的に社会的・歴史的だと考えるのである。これがさまざまな現場に赴き、その現場の組織化とそこで生起する行為を記述しようとする指向の背景となる。仮説は以下の

ようにまとめられる。

- 1 認知が社会的な起源をもっている、あるいは知識と知的行為は〈社会的に発生〉した
- 2 認知は〈社会的に組織化される〉あるいは認知は協同作業（行為）の中で達成される
- 3 知識の使用の仕方は複数あり、そのうちのどれを選択するかは社会的な同意や対立を背景とするし、選択が逆に対立や同意を生み出しもする言い換えれば知識の使用と知的行為は社会的、歴史的な背景によって変化していくものである

このようなアプローチは、学習（そして教授過程）の見方の変更と拡大をもたらすだろう。そして、このアプローチは、これまで等閑視されてきた現実の教育の過程、つまり教室における行為の組織化と進行を見えるものにするだろう。

従来、知的な行為を可能にしているコンテキストは無視されてきた。そして知的に振る舞うためには、特殊な文化的制度的な振る舞いを必要とすることも気づかれてこなかった。

しかし、認知的エスノグラフィーは、知的行為が徹底して状況的であり、コンテキストにおいて具体的なものであることを説得的に記述しつつある。そして知的な行為が、いわば言語ゲームとでもいうべき、特別の文化的制度的な行為のモードのなかで進行することを明らかにしつつある。

このアプローチは、従来の方法論と衝突する場合も少なくない。それは、従来の方法論の固定性に起因する面もあるが、認知的エスノグラフィーの側の抱える問題も議論しておく必要がある。

このシンポジウムでは、認知的エスノグラフィーをさらに豊かにすることを目標にして、議論をしていきたい。